



全国曹洞宗青年会の
活動紹介(三十二)



フェルナンデス浄賢師取材の様子

広報誌『SOUSEI』特集内容紹介

広報委員長 田たのくちノの口ぐち太悟

全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）の広報誌『SOUSEI』（二・五・八・十一月発行）では、月号一つあるいは二つの特集を組んでいます。令和元年の五月より始まった第二十三期全曹青においても、『SOUSEI』誌上で様々な特集を組んでいます。今回はその特集内容や取材の様子についてご紹介いたします。

令和元年十一月発行号では、外国人として初めて大本山總持寺で首座を勤められたフェルナンデス浄賢師を取材いたしました。お話を伺う中で、取材する側として意外だったのは、文化風習上の違和感についてはあまり悩まれておられなかったことでした。それよりも禅の修行とは何かということ、修行生活の中で自分はどうしたら良いかを考えておられ、好奇心にあふれた仏法への想いを語ってくださいました。お釈迦様の教えという共通項の前では、それぞれの人間の違いは小さなものとなるのだな、と感じた取材でした。

令和二年二月号では、「How to 寺活」と題して



山本佑介氏 青森県の介護施設でヘルパーとして勤務されています

寺活を積極的に行っている寺院について特集いたしました。寺活とは、「お寺だからこそ出来る、お寺を舞台とした活動」という意味です。各寺院の所在場所やご住職の得意分野を活かした宿坊、お寺マルシェ、縁日といった取り組みを行っておられ、それを各一ページずつご紹介いたしました。

令和二年五月号では、「これからの梅花流」として、梅花流詠讃歌を特集いたしました。曹洞宗の布教において重要な地位を占めている梅花流。しかし梅花講員が減少を続けているという問題があります。この特集では、梅花流特派師範や梅花流研修員の方々による対談「若き師範が考える梅花流」でその問題を中心に語っていただき、青森県の梅花講員の山本佑介さんに梅花講の魅力についてご寄稿いただきました。また、「仏教讃歌」という広い視点で考えるために、西洋音楽の音階を使用した仏教讃歌に取り組む「マーヤの会」の取材をいたしました。「お釈迦様の教えを、音楽を通して伝える」ことの可能性を感じた取材となりました。

令和二年八月号では、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、「新型コロナウイルス禍での青年僧侶の取り組み」について取材いたしました。子どもの一時的預かりに取り組まれた寺院。お寺での図書館「おてら文



御嶽山取材は曹洞宗長野県第二宗務所青年会のご協力をいただきました



● 執筆者プロフィール
 広報委員長
 田ノ口太悟

福岡県曹洞宗青年会所属

第二十二期より全曹青に参加。第二十三期より広報委員長を務める。最初の参加の際、広報委員会で『SOUSEI』編集を担当して以来、『SOUSEI』特集の多くに携わる。特に記憶に残っている特集は平成三十年五月号の「女性僧侶として生きる」。

庫」に取り組み始めた寺院。今では多くの方が取り組み始めている「オンライン坐禅会」を始められた寺院。試行錯誤しながらの青年僧侶の活動を是非ご覧ください。

令和二年十一月号では、「祈りよ届け、御嶽山」として、平成二十六年九月二十七日に噴火した御嶽山の慰霊登山の様子を特集いたしました。御嶽山は登山出来るようになってくるとはいえ、まだ立ち入り禁止区域もあり、噴火がいかに激しいものだったかを思い知らされました。その一方、後に続く人たちのために登山道を整備してきた努力や、登山者同士の挨拶に、「仏の心」に通じるものを感じることになりました。

これからも『SOUSEI』を手にとっていただけるよう、興味深い特集記事を掲載したいと思えます。どうぞご期待ください。